

派遣者番号	30K14	氏名	鴨須賀 悠也
研究主題 —副主題—	自尊感情を育てる意識が児童に与える影響についての研究		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	平野 朝久
所属校	江戸川区立清新ふたば小学校	校長	清澤 好美

キーワード：自尊感情、自己肯定感、道徳、主体的・対話的で深い学び

## 1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

多くの論文や報告が、日本の子供や若者の自尊感情、自己肯定感が諸外国の子供や若者と比べて低いことを問題として指摘してきた。

ところで、平成29年に告示された新しい小学校学習指導要領では、これから目指していく学びの姿として、主体的・対話的で深い学びを掲げている。人は主体的に学ぼうとしていれば、考えたことや気付いたことなどについて人と対話したくなるのではないだろうか。そして、人が主体的に対話の中で学んだことは、深い学びにつながっていくのではないだろうか。そう考えると、人が学ぶとき、この三つの中でまず大切なのは「主体的であること」だと考える。

東京都教職員研修センター(2011)は、自尊感情の低い児童の姿の一例として、「自分で判断ができないこと」を挙げている。平野(1994)は主体的な学習者の主要な特徴として、自己決定とそれに基づく行動を挙げている。そうであるならば、自尊感情が低い児童は、自ら判断や決定ができにくく、主体的な学習者たり得ないということになる。

新しい学習指導要領が目指す主体的・対話的で深い学びの実現のためには、一定の高さの自尊感情が必要条件になると言えるのではないだろうか。自尊感情が高ければ、自らの判断や決定に従う主体的な学習者たり得、主体的であるからこそ対話的な学習者となり、深い学びを得ることができると思う。

## 2 研究の内容・研究の方法

では、児童の自尊感情を高めるためにはどうすればよいのだろうか。松井(2017)は、「自己肯定感はすぐに高められるものではなく、ゆっくりと時間をかけて子供との対話の中でありとあらゆる機会を通して育てていくものである」と主張している。自己肯定感や自尊感情を高めるためにどうすればいいのかを考えると、こ

の松井の主張に沿って考えるならば、検討すべきは特定の授業方法ではなく、教師の構えや意識ではないだろうか。そこで、本研究では次のような課題に取り組むこととした。すなわち、児童の自尊感情を高めようとする教師の意識は、児童の自尊感情の高まりにどのような影響を与えるのだろうか。この課題を明らかにするため、研究の目的として次の2点を設定した。

第一に、自尊感情を高めることを強く意識している教師Aと強く意識していない教師Bが、それぞれの担任する学級において同一の指導案で自尊感情を高めることを目的とした授業を行ったとき、その意識の違いは授業にどのような形で現れるのか。

第二に、二つの学級で児童の自尊感情にどのような変化があったのかを「自尊感情尺度」を用いて比較・分析し、教師の意識の違いが児童の自尊感情の高まりにどのような影響を与えたのかを検討することである。

以上2点を検討するために、都内公立小学校第4学年学級担任である2人に研究への協力を依頼した。そして、①担任教師の意識の違いが授業にどのように現れるのか。②児童の自尊感情の変化を授業前、授業後、1か月後に「自尊感情尺度」を用いて測定し、分析した。

なお、2人の授業者には、授業前に教師用質問紙で調査を行い、意識の違いを確認した。ここでは、教師Aを自尊感情を高めることを強く意識している教師、教師Bを自尊感情を高めることを強く意識していない教師とした。

授業は道徳の時間を活用して、「自分の短所と思っているところを肯定的な言葉で表現し直すことを通して、自分を見つめ直すこと」をねらいとして1単位時間で行った。質問紙は東京都教職員研修センター作成の「自尊感情測定尺度」(東京版)の小学生【第4学年～6学年】・中学生・高校生用を使用した。

### 3 研究の結果

教師Aと教師Bとの授業の違いを明らかにするため、本授業実践における1単位時間内に担任が発した言葉を起こして、ほめたり、認めたりしている肯定的な言葉かけの回数を計測した。

教師Aは、ほめたり、認めたりした言葉かけの回数は18回。一方、教師Bは、ほめたり、認めたりした言葉かけの回数は2回だった。

また、教師Aと教師Bの授業中の肯定的な言葉かけの内容について分析した。教師Aは、児童の言葉の表現の巧みさや考えの深さを称賛するなど、発言や行動について具体的に価値付けをした言葉かけが多かった。また、拍手をしながら称賛したり、よい意見を紹介したりするなど、児童のよさを他の児童が自然に感じられるような働きかけをしていた。一方、教師Bは、どんなところがよいのか具体的に分かりにくい言葉掛けになっていた。

次に、自己評価・自己受容の数値の変化について分析した。教師Aの学級では、授業翌日に+0.22と大きく上昇した。そして1か月が経過してもその数値が大きく下降することなく、授業翌日の数値を概ね維持する結果となった。一方、教師Bの学級の上昇は+0.09と小幅にとどまった上、1か月後には概ね授業前の水準にまで下降するという結果になった。

さらに、「自分にはよいところがある」に対して「あてはまらない」と回答した児童の数についても特徴的な変化が見られた。

学級Aは授業前日4人、授業翌日1人、1か月後1人と推移し、授業前日から授業翌日にかけて減少し、1か月後もその数値を維持した。一方、学級Bにおいては、授業前2人、授業後3人、1か月後3人と推移した。

次に、3回の調査で一度でも「あてはまらない」と回答した児童の回答の推移とワークシートに記入された長所・短所の数、「自分が短所だと思っていたことについてどのように考えるか」という問いに対しての記述について調べた。

学級Aには、一度でも「あてはまらない」と回答した児童は4人おり、その全員が授業前日も「あてはまらない」と回答していた。そのうちの1人は、授業翌日には「どちらかというにあてはまる」、授業1か月後

には「あてはまる」と変容した。

この児童は、授業前のワークシートには、長所7個に対して、短所23個と長所の3倍以上の数を挙げており、日頃から自分をマイナスに捉えがちであると推測される。

しかし、授業後のワークシートには、「(短所は) いっぱいあるけど、反対にすればいいことになるのでよかった」と、数多く挙げた短所が長所になり得ることを肯定的に捉える記述をしていた。

### 4 研究の考察

自尊感情を高めることを強く意識している教師は、強く意識していない教師に比べ、授業中にほめたり、認めたりする肯定的な言葉かけが多く、そのことが児童の自尊感情の高まりを促進することが分かった。

また、自尊感情を高めることを強く意識している教師は、日常的に肯定的な言葉かけが多いと予測されるので、授業を通して高まった自尊感情が、日々の肯定的な言葉かけによって下がりやすく、維持しやすいことが分かった。

「自分にはよいところがある」の質問項目に「あてはまらない」と回答した児童は、「自分にはよいところがない」と考えていた児童ということになる。本研究の授業実践は、「自分が短所と思っていたところを肯定的な言葉で表現し直すことを通して、自分を見つめ直す」ことがねらいであった。

自尊感情を高めることを強く意識している教師の学級では、「自分にはよいところがない」と考えていた児童4人のうち3人が、授業後に「自分にもよいところがある」、少なくとも「自分にはよいところがあるかもしれない」と考えるようになったと言える。

児童がそのように変容したのは、教師の自尊感情を高める意識や肯定的な言葉掛けの実践にあることが分かった。

### 5 今後の展望

本研究では、対象とした教師が比較的経験年数の長い教師であった。若手教師を対象とした調査を行うなど、さらに調査対象を広げてみたい。また、自尊感情を高めることを強く意識していない教師の学級では、「自分にはよいところがない」と考えた児童が授業後にむしろ増えてしまうという結果になった。なぜそのようなことに至ったのか、当該児童に面接調査を行うなど、その要因を明らかにしていくことも、今後、検討すべき大切な課題であると考えられる。